

## まえがき

「形態論若手の会」みたいな研究会を開きたいね。著者 2 人がかろうじてまだ若手だった頃、学会の帰りに立ち寄った居酒屋で交わしたこの会話に本書の出発点がある。発表者を募り、研究発表と質疑・議論という研究会はすでに存在していたので、毎回設定されたテーマに対し我々が話題提供をして、参加者と議論をする会にしようということで方向性が決まった。我々が専門とするアプローチが、形態論の中では対立関係にある分散形態論とパラダイム関数形態論であることから、研究会ではそれぞれの理論的枠組みで同様の現象に関する研究をまとめ、その理論的対立点を確認するとともに、これらの理論が抱える問題点を浮かび上がらせることを狙いにした。分散形態論もパラダイム関数形態論も 1990 年代前半に誕生した理論であり、21 世紀に入り形態理論の 2 つの大きな流れになりつつあることから、少し大袈裟ではあるものの、研究会の名称を *Morphological Theory in the 21st Century* とした（乙黒の指導教授であった Andrew Spencer が 1991 年に出版した名著 *Morphological Theory* を意識した面もある）。初回のテーマが ‘Suppletion & syncretism’ に決まり、2015 年 10 月 17 日に第 1 回の会合を開いた。週末に家を空けられない人や関東圏以外の人でも参加できるように、当時はまだ珍しかった対面とオンラインのハイブリッドの研究会を Ustream を利用して実現し（後に YouTube Live に移行）、当初の狙い通り、若手の研究者や大学院生、学部生が積極的に参加してくれ、4 時間に渡りじっくり議論をすることができた。その後、2016 年 3 月 28 日に第 2 回 ‘Zero exponence/morph’, 2016 年 11 月 19 日に第 3 回 ‘Homonymy & synonymy (Blocking を中心に)’, 2018 年 2 月 28 日に第 4 回 ‘Epenthesis’, 2018 年 4 月 28 日に第 5 回 ‘Periphrasis’ と約 2 年半に渡り 5 回の研究会を開催した。

予定していたテーマをすべて終え、研究会で使った資料と参加者との議論の中身を見返して、それらを書籍としてまとめ、広く共有したいと考えるようになった。幸いくろしお出版から書籍化への前向きなお話をいただき、2

人で出版に向けた準備を開始した。研究会で扱ったテーマを再構築し、6つの現象について章ごとにまとめることとなり、2018年秋からそれぞれが担当する部分を執筆し、月例のミーティングで修正するという作業を繰り返した。1年後の2019年秋に第7章までかき上げ、終わりが見えてきた頃に新型コロナウイルスの感染拡大により状況が一変した。前例のない事態に大学での仕事も混乱を極め、保育所や小学校も閉じられ、2人とも自宅で子供を見ながら、オンラインで大学の業務をこなす中で、本書の執筆が全く進められない状況が1年間続いた。ようやくコロナ禍における仕事の進め方も定着した2020年の秋に、執筆を再開した。オンラインでのミーティングを繰り返し、1年後の2021年の秋に全章を書き上げることができ、その後の紆余曲折を経て、ここに書籍として出版できる運びとなった。

ここに至るまでには、多くの方々の支えがあったことは言うまでもない。まずは本書の出発点である研究会に参加していただいた研究者、(当時の)大学院生、学部生の皆さんに感謝を申し上げたい。当時は珍しかった対面・オンラインのハイブリッド研究会が開催できたのは、早稲田大学プロジェクト研究所の言語情報研究所の支援によるものである。東京大学の関洋平氏には、本書の前半部分の原稿に関して、詳細なコメントをいただいた。乙黒は早稲田大学グローバルエデュケーションセンターにて「言語学(形態論)」の授業を2017年度から担当しており、そこで田川も2022年度まで毎年ゲスト講師として講義を行った。授業内で多くの質問、意見をくれた受講者の皆さんにも御礼申し上げたい。最後に、くろしお出版の荻原典子氏には、本書の企画段階から様々なご意見をいただき、原稿に対しても詳細なご指摘、コメントをいただいた。心からの感謝を申し上げたい。

本書が学部生、大学院生、若手研究者の研究の一助となり、日本国内の形態論研究の活性化につながれば幸甚である。

2024年7月

乙黒亮・田川拓海

# 目次

まえがき	iii
グロス・略記号一覧	xi
第1章 はじめに	1
第2章 形態論への2つのアプローチ	11
2.1 はじめに	11
2.2 形態理論の2つの流れ	13
2.3 分散形態論とパラダイム関数形態論	18
2.3.1 分散形態論	18
2.3.1.1 分散形態論の概観	18
2.3.1.2 文法モデル	18
2.3.1.3 統語論でどこまでも：Root 仮説	20
2.3.1.4 形態部門における後期挿入	22
2.3.1.5 DMにおける形態構造	24
2.3.1.6 装飾的形態論と統語部門後の操作	26
2.3.2 パラダイム関数形態論	27
2.3.2.1 素性	28
2.3.2.2 表出規則	34
2.3.2.3 パラダイム関数	36

---

2.4	まとめ	39
	練習問題	40
	コラム：素性について	41
<b>第3章</b>	<b>融合</b>	<b>43</b>
3.1	融合とは	43
3.1.1	標準型屈折からの逸脱	44
3.1.2	融合の種類	48
3.2	DMにおける融合	51
3.2.1	語彙項目の優先順位	51
3.2.2	語彙項目の優先順位：競合と不完全指定	52
3.2.3	消去を用いた分析	56
3.2.4	その他の融合現象の分析	58
3.2.5	まとめ	59
3.3	PFMにおける融合	60
3.3.1	内容パラダイムと形態パラダイム	60
3.3.2	素性マッピング	63
3.3.3	パラダイム間のインターフェイス	67
3.4	まとめ	69
	練習問題	70
<b>第4章</b>	<b>補充法</b>	<b>71</b>
4.1	補充法とは	71
4.1.1	標準型屈折と補充法	72
4.1.2	補充法の種類	74
4.2	DMにおける補充法	80
4.2.1	Rootに対する後期挿入	80
4.2.2	補充の際に参照される統語情報	81
4.2.3	統語的な情報と補充	82

	4.2.4	包含関係と局所性 . . . . .	84
	4.2.5	DM と補充の研究 . . . . .	87
4.3		PFM における補充法 . . . . .	88
	4.3.1	形態統語素性による補充法 . . . . .	88
	4.3.2	純形態的な補充法 . . . . .	90
	4.3.3	音韻的要因による補充法 . . . . .	91
	4.3.4	統語環境による補充法 . . . . .	92
	4.3.5	統語構造と補充法 . . . . .	94
4.4		まとめ . . . . .	95
		練習問題 . . . . .	96
		コラム：純形態的という概念について . . . . .	97
<b>第 5 章</b>		<b>ゼロ形態</b>	<b>99</b>
5.1		ゼロ形態とは . . . . .	99
5.2		様々なゼロ . . . . .	101
5.3		DM におけるゼロ形態 . . . . .	112
	5.3.1	その他ゼロ形態 . . . . .	113
	5.3.2	優先的ゼロ形態 . . . . .	115
	5.3.3	特定の環境において現れる依存ゼロ形態 . . . . .	119
	5.3.4	ゼロ形態の実在性 . . . . .	121
5.4		PFM におけるゼロ形態 . . . . .	123
	5.4.1	語幹選択と活用型指定 . . . . .	123
	5.4.2	同形出力と恒等関数デフォルト . . . . .	125
	5.4.3	形態音韻規則によるゼロ . . . . .	126
	5.4.4	イタリア語動詞活用のゼロ形態 . . . . .	128
5.5		まとめ . . . . .	130
		練習問題 . . . . .	131

---

<b>第6章</b>	<b>虚形態</b>	<b>133</b>
6.1	虚形態とは . . . . .	133
6.2	ラテン語の幹母音 . . . . .	139
6.3	DMにおける虚形態 . . . . .	141
6.3.1	解離素性 . . . . .	141
6.3.2	ラテン語の幹母音と解離節点 . . . . .	143
6.3.3	その他の虚形態 . . . . .	148
6.4	PFMにおける虚形態 . . . . .	149
6.4.1	語幹形成関数による幹母音の具現化 . . . . .	150
6.4.2	挿入辞の具現化 . . . . .	151
6.5	まとめ . . . . .	153
	練習問題 . . . . .	154
<b>第7章</b>	<b>阻止</b>	<b>155</b>
7.1	阻止とは . . . . .	155
7.2	様々な阻止 . . . . .	159
7.2.1	屈折形態と阻止 . . . . .	159
7.2.2	類義語による阻止 . . . . .	160
7.3	DMにおける阻止 . . . . .	163
7.3.1	語同士の阻止 . . . . .	164
7.3.2	その他の阻止 . . . . .	169
7.4	PFMにおける阻止 . . . . .	170
7.4.1	屈折形態での阻止 . . . . .	170
7.4.2	派生パラダイム . . . . .	172
7.5	まとめ . . . . .	178
	練習問題 . . . . .	179
<b>第8章</b>	<b>迂言法</b>	<b>181</b>
8.1	迂言法とは . . . . .	181

8.1.1	様々な迂言法 . . . . .	184
8.1.2	迂言法の特徴 . . . . .	192
8.2	ラテン語の迂言形 . . . . .	194
8.3	DM における迂言法 . . . . .	197
8.3.1	接辞と迂言形 . . . . .	197
8.3.2	ラテン語の完了形に見られる迂言法 . . . . .	199
8.3.3	英語の比較級・最上級に見られる迂言法 . . . . .	203
8.3.4	DM における迂言法のまとめ . . . . .	205
8.4	PFM における迂言法 . . . . .	206
8.4.1	構文としての迂言形 . . . . .	206
8.4.2	逆行指定 . . . . .	209
8.5	まとめ . . . . .	212
	練習問題 . . . . .	213
	コラム：構文について . . . . .	214
<b>第 9 章</b>	<b>おわりに 今後の形態理論の展望</b>	<b>217</b>
9.1	形態素基盤の理論の発展と展望 . . . . .	217
9.1.1	DM 以外の理論・モデル . . . . .	217
9.1.2	DM における最近の研究トピックと今後の展望 . . . . .	220
	9.1.2.1 局所性と異形態 . . . . .	220
	9.1.2.2 異意味 . . . . .	221
9.1.3	競合と形態の分布 . . . . .	222
9.1.4	実験を用いた研究 . . . . .	222
9.1.5	DM の特徴と課題 . . . . .	223
9.2	語・パラダイム基盤理論の発展と展望 . . . . .	223
9.2.1	形態論における統計的アプローチ . . . . .	224
9.2.2	類推と予測可能性 . . . . .	225

参考文献	231
事項索引	241
言語索引	252
著者索引	253

# 第 1 章

## はじめに

本書は現代の形態論研究において盛んに議論されているテーマの中でこれまで日本国内で刊行された入門書、概説書、研究書であまり取り上げられてこなかったものに焦点を当て、その基本概念を実際の言語現象と合わせて概観すると同時に、それらの現象の理論的分析を提示することを狙いとしている。具体的には融合 (syncretism), 補充法 (suppletion), ゼロ形態 (zero morph), 虚形態 (empty morph), 阻止 (blocking), 迂言法 (periphrasis) の 6 つのテーマを取り上げ、分散形態論 (Distributed Morphology: DM) とパラダイム関数形態論 (Paradigm Function Morphology: PFM) という 2 つの理論的枠組みでの分析を示す。

1990 年以降海外では形態論の入門書、理論的概説書が多数出版され、改定されて版を重ねているものもある (Matthews (1991), Spencer (1991), Aronoff and Fudeman (2005), Katamba and Stonham (2006), Booij (2007), Lieber (2010), Haspelmath and Sims (2010), Stewart (2015) など)。さらに近年形態論に関する大部のハンドブックも刊行されている (Lieber and Štekauer (2014), Baerman (2015), Hippisley and Stump (2016), Audring and Masini (2018), Lieber (2021) など)。形態論研究の学界の流れを反映してか、これら全てにおいて上述した 6 つのテーマは、多少差はある

ものの中心的なものとして取り上げられている。理論面においても海外では古くは 1950 年代に、その後とりわけ 1990 年代以降に、形態論のモデルは形態素 (morpheme) を基盤にすべきなのか、語・パラダイム (Word-and-Paradigm) を基盤にすべきなのかという議論がなされてきた (Hockett (1954), Robins (1959), Matthews (1972), Anderson (1992), Halle and Marantz (1993), Aronoff (1994), Beard (1995), Stump (2001, 2016), Bachrach and Nevins (2008), Embick (2010), Bobaljik (2012), Spencer (2013) など)。現在前者の主流が DM であり、後者の中心的理論の 1 つが PFM である。近年日本国内においても DM の枠組みを採用した研究は多く見られるようになったが、その理論的内容を日本語で詳細にまとめた文献はそれほど存在しない。PFM, あるいは語・パラダイム基盤のアプローチ全般に関しても、日本語で参照できる文献はほぼ皆無である。よって本書がこれらの理論の入門書の役割を担うことも目指している。またこれら 2 つを合わせて提示することで、形態素という概念を仮定するのか否か、パラダイムという語と語の間の関係の実在性を認めるのか否か、といった現代の形態理論における重要な対立点が明確になる。それと同時に両方の枠組みで同一の現象の分析を示すことで、それぞれの理論的仮定においてどの部分が問題となり得るのかを浮かび上がらせる。

## 構成

本書は全 9 章から構成される。この序章に続き、第 2 章で現代の形態論で理論的に対立している DM と PFM という 2 つの理論的枠組みを導入し、その後 6 章に渡って経験的、理論的に重要な問題を提起する現象、概念を取り上げ、終章ではそれぞれの理論の今後の展望について議論する<sup>1</sup>。

---

<sup>1</sup> 以下では説明に具体性を持たせるため、形態論、形態理論に関わる用語を一部使用しているが、それらの詳細については第 2 章以下で導入する。

## 第2章

# 形態論への2つのアプローチ

### 2.1 はじめに

形態論とは言語の中でも語という言語単位を対象とし、語にまつわる諸現象を研究する領域である。語は様々な形で語形変化したり、複数の語が結びついて別の語を形成したりする。例えば、以下の2つの英語の文で使われている **walked** と **walks** という語は **walk** という語が語形変化したものである。

- (2.1) a. Mary walked to the station yesterday.  
b. John walks to the station everyday.

ここでその語形変化の引き金となっているのは、(2.1a)では過去時制という時制に関する情報であり、(2.1b)では現在時制であるという時制の情報と主語が3人称単数であるという情報である。

また **walked** と **walks** はそれぞれ **walk-ed** と **walk-s** と2つの部分に分解できる。その中で **walk** がこの語の中心となる部分で**語幹 (stem)** と呼ばれる。一方 **-ed** や **-s** は**接辞 (affix)** と呼ばれ、他の要素に付加する要素である。接辞が付加する先の要素のことを**基体 (base)** という。**walk-s** や **walk-ed** の場合は、接辞が語幹に付加しているので、**walk** という語幹は基体でもある。

## 第3章

# 融合

### 3.1 融合とは

語は形態統語素性によって語形を変化させるが、特定の環境や語彙素において区別が消失する場合がある。例えば英語の **write** という動詞は以下の (3.1a) のように過去時制を表す過去形としては **wrote**, (3.1b) のように現在完了で使われる過去分詞形としては **written** という形で現れる。しかし (3.1c, d) が示すように、大多数の動詞において過去形と過去分詞形は同形となる。

- (3.1) a. Sue *wrote* a letter to Sam.  
b. Sue has never *written* a letter to Sam.  
c. John *thought* about going to college when he was young.  
d. John has never *thought* about going to college in his life.

異なった形態統語素性が同形で表される例は代名詞にも見られる。3人称単数男性の代名詞は (3.2a, b) にあるように対格としては **him**, 属格（所有格）としては **his** で現れるが, (3.2c, d) のように3人称単数女性の代名詞ではどちらも **her** と同形になる。

## 第4章

# 補充法

### 4.1 補充法とは

まず以下の英語の例文を見てみよう。(4.1)では動詞 **play** が使われており、現在時制の (4.1a) においては **play** という語形で、過去時制の (4.1b) においては **-(e)d** 接辞が付加され **played** という語形で表出している。一方 (4.2) では動詞 **go** が使われており、現在時制では **go** という語形なのに対し、過去時制では **went** となり語幹が変化している。また形容詞においても (4.3) に見られる **tall** のように通常は原級、比較級、最上級の語幹は同一であるが、(4.4) の **good** は原級が **good** なのに対し比較級が **better**、最上級が **best** となり異なる語幹が用いられている。

- (4.1) a. Our daughters play football on weekends.  
b. Our daughters played football last Sunday.
- (4.2) a. Our kids go to music school on Saturdays.  
b. Our kids went to music school last Saturday.
- (4.3) a. Tom is tall.  
b. Tom is taller than John.

## 第5章

# ゼロ形態

### 5.1 ゼロ形態とは

まず (5.1) にある英語の例を考えてみる。(5.1a) では名詞 *dog* に接辞 *-s* がついて複数形が *dogs* という語形で表出している。一方, (5.1b) の *ox* では *-en* という異なった接辞を語幹に付加することで複数形 *oxen* が形成されている。どちらの場合も, [plural] という素性がそれぞれ *-s*, *-en* という接辞によって具現化されていると考えることができる。

- (5.1) a. All the dog-s are barking at the strangers.  
 b. All the ox-en were swimming across the river.

では (5.2) に現れている *sheep* はどうだろうか。この語は (5.2b) のように複数であっても接辞の付加が行われず, (5.2a) の単数形と同形になっている。この場合, [plural] という素性はどのように具現化されているのだろうか。

- (5.2) a. That sheep is eating grass in the meadow.  
 b. All the sheep are eating grass in the meadow.

英語における [plural] という素性は一貫して同じ接辞で具現化されるわ

## 第 6 章

# 虚形態

### 6.1 虚形態とは

英語には (6.1a) のように末尾が *-ed* で終わる形容詞が多数ある。これら末尾の *-ed* は音韻的には動詞の過去時制を表す *-ed* 同様、直前の要素の音韻的特性により /t, d/ の直後では /ɪd/ もしくは /əd/, そのほかの有声音の直後では /d/, 無声音の直後では /t/ というバリエーションが見られる。しかし、これらの形容詞にさらに接辞を加えると、特徴的な音韻変化が起こることがある。例えば、(6.1b) のように *-ness* という接辞を付け形容詞を名詞化すると、/d, t/ の前に /ə/ が挿入され、/t/ の場合はさらに有声化され /d/ となる。同様の現象は (6.1c) のように *-ly* を付加することによって形容詞から副詞を作る際にも見られる。

- (6.1) a. absorbed [əbzɔ:rbɪd]  
           marked [mɑ:kt]  
           well-formed [weɪfɔ:md]  
           amazed [əmeɪzd]  
           supposed [səpəʊzd]
- b. absorbedness [əbzɔ:rbədnəs]

## 第7章

# 阻止

### 7.1 阻止とは

多くの言語において、語に特定の接辞を付加することでその語の品詞を変えることができる。例えば (7.1) や (7.2) に示すように *-(i)ty* や *-ness* はともに英語において形容詞から名詞を派生する接辞である。

- (7.1) a. It is *uncertain* whether the proposal will be accepted.  
 b. There is still *uncertainty* as to whether the proposal will be accepted.
- (7.2) a. John was fully *aware* of the danger of smoking.  
 b. John is trying to raise the *awareness* of environmental problems.

Aronoff (1976) はこの *-(i)ty* と *-ness* の付加による名詞化の可否に違いがあることを指摘している。表 7.1 に示されるように、*-ness* 接辞による名詞化は *-ous* で終わる形容詞に対して原則としてすべて適用可能であるのに対し、*-(i)ty* 接辞による名詞化には可能なものと不可能なものがある。この *-(i)ty* 接辞による名詞化の可否は *-ous* 形容詞の元になる名詞が存在するか否かに左右されるとしている。つまり *glorious* や *furious* から *\*gloriosity*

## 第 8 章

# 迂言法

### 8.1 迂言法とは

これまで見てきたように、形態論というのは「語」という言語単位に焦点を当て、語形成に関わる様々な現象を研究する分野であるが、通常は接辞化などの形態操作によって具現化される形態統語素性が複数の語として表出することがある。例えば表 8.1 に示すように、ラテン語の動詞は能動態ではどの時制、アスペクトの組み合わせにおいても一語として表出するが、受動態では完了、過去完了が助動詞（繫辞）を伴った形で具現化される。

	能動	受動
現在	capit	capitur
未完了	capiebat	capiebatur
完了	cepit	[captum est]
過去完了	ceperat	[captum erat]

表 8.1 ラテン語 *capere* ‘take.3sg’ の活用 (Haspelmath 2000: 656)

表 8.1 の語形はすべて *CAPERE* という語彙素の活用形として考えること

## 第9章

# おわりに 今後の形態理論の展望

### 9.1 形態素基盤の理論の発展と展望

#### 9.1.1 DM 以外の理論・モデル

DM は生成統語論をベースにしているという点が大きな特徴であるため、ここでは DM が登場して以降の DM 以外の生成統語論をベースにした理論・モデル、その中でも統語部門の比重を大きく見ているものを概観する。

DM 以外でその名称に「形態論」が入っている理論・モデルは少ないが、その中の1つとして極小主義 (Minimalism) の登場直後に提案された極小形態論 (Minimalist Morphology) が挙げられる (Wunderlich 1996)。DM との最も大きな違いは、早期挿入 (early insertion) を採用しており具現的なモデルではないという点であろう (Wunderlich 1996: 93)<sup>1</sup>。

また、DM の影響がどれほどのものか定かではないが、極小主義の登場

---

<sup>1</sup> Stewart (2015) も極小形態論を増分的なモデルであると評価している。